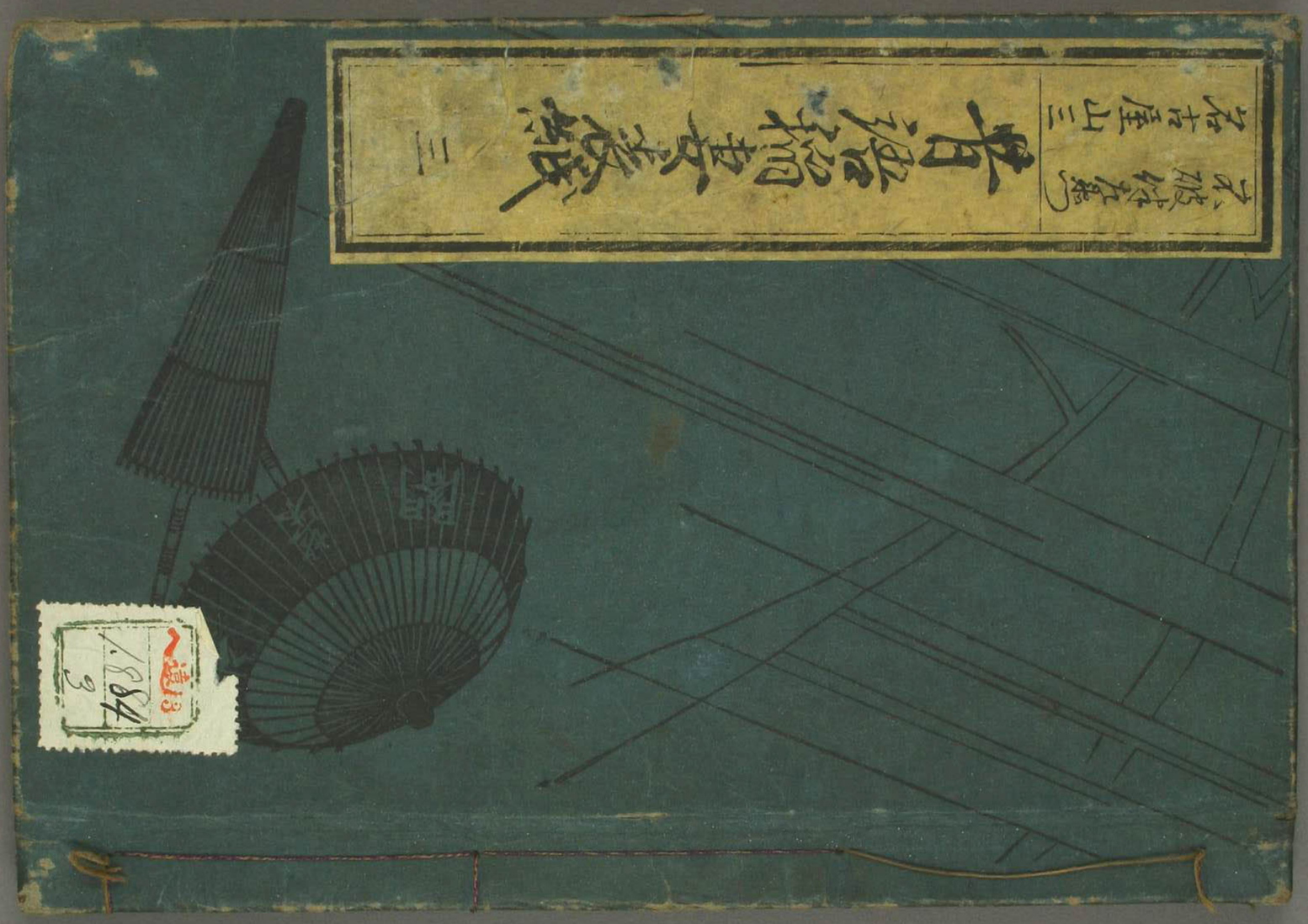
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Centimetres
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



1848.3

早稲田大学図書館

稚妻表紙巻之二

江戸　山東京傳編

本清

五　厄神の報恩

扨も佐く良三八郎ハ。妻子と具して丹波の國ふるさと。大江山の麓究竟の里ふかくに住けるが。小くのたくわへも。日くの費ふつひとそ。別ふかりつひの便もあければ。みぐるし山畑をたゞ。仕別ぬ業の辛苦ふたへと妻磯菜ハ當國の名産ゐる藺莚を編。市ふひさきてはぐくの價をとり。夫婦ともかせぐふ〜て。あ人の児多を育権月日をおくるぬ。ある日三八郎おりく〜。忠義のあるゝひあり。罪あき藤波を殺せ〜。ゑとを不便なり。後ふゆべ。若殿御勘當をうけ。伊行方なくあるひつるは我心づく〜も藤波が非業の死もふ水の泡ういふきゆくあり。ぜゑ彼が

早稲田大学図書館 1884 9

冥福を得る種ふもと農業の片手ゐも。念珠とゝふさゝぐ。たゝえまと念仏をとゝあくければ里人異名をつゝて六字南無右衆つゝとびけるをみゞくも世と忍ぶ小いさき名なりと思ひひて。つひふ実名とたゝりけりさて又後くはば藤波を殺しなる板金岡の筆百鱟の圖の絵巻物紛失し。長谷部の雲六と計りて。盗取たりと沙汰ありつゝは盗人の立田の山ふ入て。毎ゆゞかゞしの穢たる名を得ること豈恥ざんや。渇れども盗泉の水と飲を熱きれども悪木の陰ふ息をとゝまるなりのと。いつふもしてゐの巻物とたゞゞ出し。汚名をそゝがゞやと思てゐのひ。一つゐん奸臣不破道犬ゞ悪意を見あらはしてお家の禍の根をたち。義波ゞ縁者ふ出会ゝて。恨の刃ふかゝを死後の名を清くとゞゝおりひさゞめ。折く面をかくして大和の國ふいくて。或へ京都ふいくて便宜とゝめびひぬ。

かくてある日。大和ゝ京ふ赴くゝ。木津川の渡船ふ乗けるふ。船中乗合のうちふ一人の老女あり。紅裏の昔模様のゆゞたる小袖ふ松は菱の紋つけたるを見し。さやうなる色と三輪ゝみる膝ふつけ。細き竹杖ふゝゞりたるゞ。頭い佐野の白芋と乱セるゞく。身うち枯木のゆうふ痩ゞたれど人品さゝゞで賤ゝゝを紫の小袖着たる女の船中ふゐるを。怪くいみきゝふさゝゞふく。袖をおりてふ拭ひく。片をゝふひそまり居ゝゝ。ゞゞく船向の岸ふつき。南無右衆つ衆人ゝゝふ岸ふのゞり。かの老女く後ふおく迷前ふとゝみゝく行けるふ。時紅日西ふ落ゝ。天色已ふ晩ゝんゝとゝふむ右衆ワ草鞋のひもとむをゞひゞふ。かの老女い遥小行過たるゞ。樹木おゞひかゝその暗き所と思る時。四五疋の犬宗来ゝてとゝまき頻ふ吠くゝやどくゝひきんゝと。老女杖をあげく打もゝをゞゐもゝゝゝん形勢あり。

六字南無右衛門
木津川の渡ふく
老女の危難を
さとる

六字ふむ右衛門

ろう

ふじとらまろ

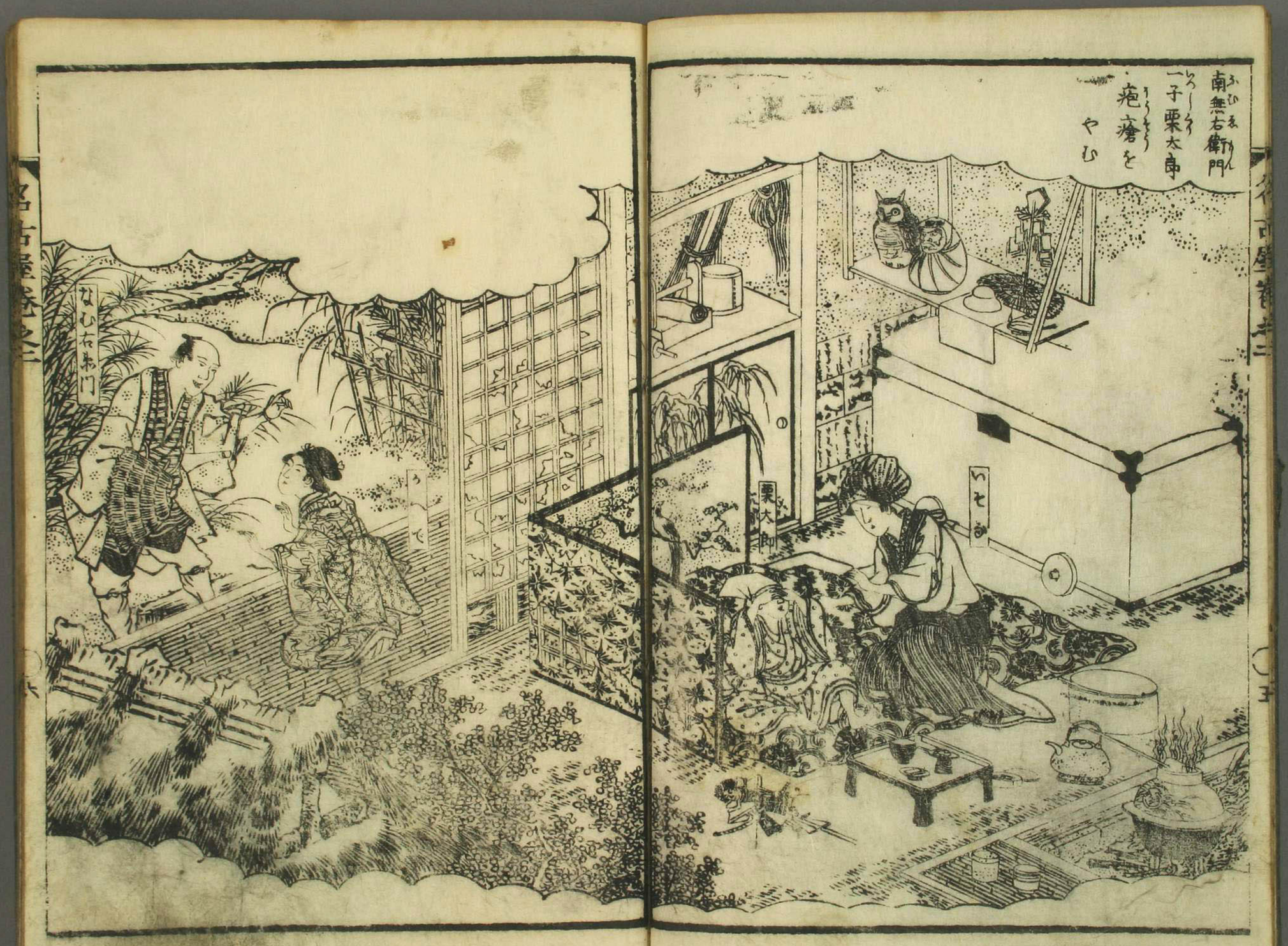
老女

かゝる難義と思ひてふむ右衆つ走りつゝ。大ごもと打ちしして。老女と思ふよ。
涙くおそれたるふや地ふたゝれ伏て息もたゞあげ泣しべ介抱しくさゝめ〳〵
さゝりけるふゝ。正氣ふゝり。ぐくのおん方ら〳〵ちらさしぐと。かゝる難義と救ひ
むるかてだけおさよ。仏法恩かゝゝ報ぐくんと。あつく礼とのぶしべ。南無
右衆つ打ぢくさぐり厚き詞をおさむふゝ。そものゝふ京の
町まで送り行まゝ〳〵〳〵て。相伴ひ三条の四つ辻あく東西ふ別ちぬ。
さて南無右衆つふ一月ぐり京都ふぐまり。百鰻の巻物と為はけるぐ。
その留主の百一子栗太郎ふ時年八才ありしが。疱瘡と。毋磯菜ぐ
辛労おかさゝゝ。鹿瘡の神の棚をまうけ。赤幣束挟俵張子の達
磨木兎をら。起臥ふ心をつけ。茜の頭巾を〳〵針ることを忌て隣家の
手とり。紅火燭の朱とぐふ紫の色ふ更あり。詞の禁忌火のゝ〳〵。

食物のさゝ合まで。あぐふ心をもちひ湯尾峠の孫杓子。鮮茶乃呪
かぐよ。ぐとゝふこゝふ皆仕法して。看病けるぐいとありに鹿瘡ふく熟氣
ぐく目とひきつけ〳〵今もたえいくくありふこく変〳〵ふ。ふく出痘
ふいくう。面上總身ときゝもふく發瘡しけびかくて食も危し。
時も時折も折とて。夫の留主ふるを便なきこゝふせんと當惑し。
けふやあをやと飯りと待侘娘楓を日ふ〳〵ふ村ふふ〳〵てうかゞい
をれど。飯かげだふ足〳〵〳〵〳〵益愁ぬ鹿瘡神の機嫌ゝ〳〵ふゝ。
栗太郎足ぐうをふさけび小豆枕とふげうふ人形の脚ひきぬき
なぐそあれ泣〳〵。ふぐ〳〵ふうふ〳〵ふぐきゝれど泣止を殆めてあり〳〵なる
折〳〵。ふむ右衆つ一月ぐり〳〵家ふふる磯菜森び出むひて。ちふ栗
太郎ぐ支を語ふゝを。ふむ右衆つ氣づひ。そぐ〳〵せぶれ屏風を

ひきあけて。扶子と見るふ。今までふきさけびてありしなる栗太郎。ふむ右糸つ
と見て礼正〳〵く座をつくろ。手をつきて。ひけるへ。こゝ御ありひもけざる女うか。
山家のもん身の宅ふく山小児のもん身の子息ゆてゆう。これい前の月木津
川の渡場ふく。危難と救たまひし老女ゆてもぐう。我実い疱瘡の神ゆ
ゆ我輩大をおそく支人ふ立たり。我ちをく京都ふあく。痘瘡を
為ちゆたるゆ。四五日さき當國ふくう。もん身の家ゆも来ふ宿し。
山小児ふつく疱瘡を為ちゆゆ。元来山児難症ゆく。今一両日を
ゆれい落命をゆきゆふ危急の節もん身飯宅〳〵たまひし畢竟
山児の命つゆ延ゆり。前の日の厚意を報ゆ山時なり。我ちみゆ
立ちべし。我ちゆれば疱瘡速ふかせもちく平愈をくさなり。山ちゆもも
もん身の族の家ゆい亨〳〵ちゆ。山度のべく誤ちゆべ。

ゆん身の姓名いいふく問ゆぞゆむ右糸つその実為を告れば。ちく〳〵い
勉見のうちふさく〳〵三八宿〳〵ゆきつけく簪ふかけおくゆ人。その間
ちく〳〵ゆる家ゆい。我い勿論ちゆ〳〵ゆの者ちゆ立〳〵ちゆゆ。ちやいくゆ
ゆちゆゆりく〳〵ひおり。栗ち郎悶絶〳〵たゆゆく見へ〳〵ゆ。老女乃次ゆ
けゆのごく〳〵ゆ。外のゆく〳〵走り出く〳〵失ゆ。磯某栗太郎を
抱き起せば。不思議や疱瘡俄ふもゆちく〳〵ゆふゆ。氣力ゆゆ
ゆく〳〵ゆりけるゆゆ。夫婦奇異の思ひちゆふ。ちみふ笹湯をかけ。赤飯を
調ゆて。神おくりゆ。ゆのゆゆく〳〵ちゆ。痘瘡の日数ゆ。三日發熱
三日出痘。三日起脹。三日貫膿。三日收靨。ゆ常数ゆふ。栗太郎ゆ
痘瘡ゆく俄ふゆちゆ。全くゆの神のたゆけゆ。南無右糸つゆ
好意ゆ感ゆ〳〵ゆ人ちゆ感〳〵ゆく〳〵ゆ。


南無右衛門
一子栗太郎
疱瘡を
やむ
栗太郎
いとせう
なむ右衛門

栗太郎がのぐ。平愈して再び召もとめ。再又一つの災をいできふける
礒菜ある夜灯をたて鏡ふしひして髪をとりあげつゝふ。鏡のうちふ
蒼波が顔ありくとうつりて。おそろしきさまかしぼのふやといひく背後を
ふり見れば。毬のごき心火窓をこえて孤さう家のむきのうふてかゝ
笑ふ声を。礒菜ハたゞらどのけさあふたるし。其侍絶入ぬ南無
右衆つのいてふゝめき抱き起して。醒藥ふどふへけふをゆうくいきつ
けるこしより心衆日ぐふよりて。のもをまを邑あをざめて痩おろへ。
日ふ異ふ日ありそいろ益ますそうもなえどふむ右衆つまゞしき
中ゆも。良藥をかゝくふるとのどと。とゝく蒼波がいかる顔因さらふ
えぐう其交くふりゞへ苦しを。ゞどくく命もあゆくなえ此時娘
楓ハ十二才。栗太郎ハ八才あれども。兄弟ともふ年ふ仏をゞれく

かゝくこき生まふく。殊更世間ふまれある孝子あれば世の病を
ふく巻く。兄弟枕方あゝべふつきそひて去ちゝも病床をあれを。
うるぐわみさそうかゝし。心を尽してを看病けるかゝる病人あり
ゞ。一日もありひをせざれば烟を立かぬる身あれば。せんをゞるふむ
右衆つい病人を兄弟の子ともふあゞけおき。其身いたゞやしふ
出く。ワゞふ日雇のあるひを得て。其日ふ仏ある心れ昔しきのうゞあり
うん量想べし。夜ふるれゞふむ右衆つ家ふありて看病をれい。
兄弟の子ども皆ゝへ仏神の力ふたのゝ奉るとうふるゝ。さいひ
あゝを。ふうう手をゝをきあひ毎夜完太ちの観音ふたゞまうゝて。
南無大悲観音菩薩我くゞ一命をとうぬひ何いを母の病苦を
救ひくと祈念し。三七日ゞ間まうでけるふ仏も孝子の誠心を

感じ給ひけるかや。滿願の夜より。母の病やうやおこたり。一月たちかへりの
うちに全快し。氣力もとりて前よりもまさる盛ふあるは誠是孝行の
功德大なる由なるべし

○孝子の物語のたいでふ記して。世の童子ゐまちことあり。明心
宝鑑といふ書よ。我親に孝行をなすべし。子も又我に孝行をなすべ
きのなり。おのれ既に不孝なれば。子も又なんぞ孝行をなんや。これ
孝順なれば。又孝順の子を持べし。山吉又疑しく思ひて。誓ひて黙し
滴くと落る雨をたづねて見よ。そもくと落るつぶをたづねよ。されば
我父母の老後を安穩ならしめば。我も又老後安穩なるべし疑ふ
○又世範といふ書よ。おのれ人の子なれば。身をねりまてをしも
父母の心ふそひをもて。孝道とつくべきなり。父母身をうてのちも。

其霊ゐ對して。存生ゐひおれるごとくそむくべかるべ。
いふと孝道とつくべきなり。おのれが幼少の時。父母の愛念
抱育の恩とぶ報ることありがたし。世間の孝道とつくべき
あさいざるのの。他人の小兒を育あるその情愛の厚きを
見て。父母の若勞と思ひて自悟こべしいつて。古より孝とそし
て天のめぐみ深くあるひい立身出世して高禄の人なり。
或い運とひらけて千金を得富貴の身となる例。あげてかぞへ
づらし。又不孝ゐして天の四討とうけ。病苦貧苦とうけ。悪
獣毒虫ゐ害せられ。雷ゐうたれふるぶるて非命ゐ死する例も
又もくふかるべ。されば幼少より。孝道い人倫第一の道ゐて
決定の役儀とりて。道理とよくくわきまへて少しも父母の

おゝせとてもうぐ。朝夕恭敬おそこゝぐ。一生安穩あゝしもうこゝふ
心ぐ〜べき支ぞし

㊅ 因果の小蛇

かくて後ち南垂右衛つぐ家内。垂事ふ打ちけるが。一日ふむ右衛つ
たぐ母〜ふ出けるふ草むゝの裏ゝ。丈三尺ぞりの蛇いぞ〜墓をゝ。
ふぐくのまんゝとぐむ右衛つこれと見て。墓をたとけまゝ〜。いゝふ
蛇よ汝我ゐるその墓とゆるせし。さあ〜べ我娘と汝ふふべきぞといひ
けるふ。蛇ひとぐとゆ入る体ゆて。墓と放さしゆ。れの草海き呼ふかれ
入ぬさて農業とりて宮ふ飯けるふ其日の夜半の比娘楓俄ゝ發
熱〜して若〜〜。垂たゝくゝゐきけまべ。両親おどろきて目とさゐ〜。ゐそ
ぐ〜〜く抱起〜てゐれば怪哉小蛇楓ゐ腹ふまきつゝ。かゐ首とたゝく。

舌と土てうどゝくゝゐ。おそゝ〜ふどもおゝろゝゐ。礒菜れとゐて身の毛
いよだち。泣垂ふなりておく取捨ゆりてよといふ。ゐむ右衛つゝく。我登かと
蛇墓と呑を見てたをけゐゐ。若墓を放ゆ〜べ我娘とふべ〜〜と
ひけるが。蛇我戯を実〜〜て来まるふ疑か〜戯言いまゐきてゐゐ。
元蛇ハ嫉心ゐきゐのとすゝ。眼前ふかゐる奇怪をゐる不思議さよと。
いひけく蛇をひきとゐち。薫のうちふ入〜携へ去。大江山の谷底ふ捨く
ゐりける小其ゐつぐゐ夜。ふゐ〜び楓發熱〜して若〜〜ゐの間ゐゐまゐ蛇
来りて。腹ふ巻つく支前のごし。ゐむ右衛つ益怪〜。ゐ〜〜殺〜ゐゐ〜
と思ひ蛇ハ首ふ魂ゐりく首と碑ゐれば生ゐるゐのと云てゐれ。の
蛇とゐちく。平〜ゐる石の上ふおき。斧の脊とゐく首と微塵よ
打ちきけるゐ。血〜ふゐと飛散て。傍ふ居ゐる栗太郎ゐ。面上ゐ

かくこそひくく呼とさけびく倒まろぶふむ右ゑつ蛇を捨て抱き起せども。
栗太郎が両眼ゑ蛇の血ちくくとりたる様子ゑく。痛堪がたくくく
おめきさけびぬ。礒菜もいそぎまどひて介抱をなすに。ちだくくあり
やうく泣止けるが両眼ひくく支ゑさいなどをるく瞼たくくとしあうぬ。
ふむ右ゑつい死したる蛇を撫へもき。遠所ゑ捨てかくりけるがいまぐ
くらぐるさとゑ蛇又来て巻つくとれの如くふむ右ゑつ巻といくちち
此度へ焼殺さをやと火中ゑ投じけるが。ちだくくありて火中を飛出まさ
巻つきぬかくさめぐわくく取捨んとをれども。蛇の執念いくゑしして。ちだくも
まるのれを後ゑはせんくを尽て其侭ゑふくくおきけるが。唯腹ゑ巻つきたる
のくゑて。別ゑ害とゑを与えるく楓もたぐめのゑどく我身をぐゑ抱をくく
おりひけるが後くく蛇ゑ別ちとみて。前生の因果とあらるかくけて

憂念涙くくゑ。和多我食物をわちちゑへ養ひけり。蛇もくくれて食事
の時ゑいくらしい情ようゑ首を出せるのくちくゑぬ。栗太郎い蛇血の
毒氣両眼ゑ入て眼疾くゑりさめぐ療をくくと治くくつゑふ
生れもつぬ盲目とぞゑりふける。礒菜左りゑ楓をとゑ右ゑ栗太郎
をくくと二人をくくく顧くいつゑ。便なれ子どもが形勢や情けの神仏や
楓い世ゑたらひる。姿養ゑ生れつきたくひ女御更衣ゑたくも。
くくくくゑ容儀るゑ妖蛇ゑ又くくれて人の交りをぬ身とゑり
栗太郎い生つきもきくくゑ心ぐへもさぐれてかくくありゑく。ゑりひも
盲目くるくくさよ。弥更兄弟とも孝乃ゑくくのゑるに。
くくくかく薄命ゑいありけるぞや。いくる宿世の因果ゑく。かく災の
ゑくる古へぞて。悪歎の涙ゑむせびれが兄弟の子どもあくそゑくき。

藤波が怨魂
小蛇となりて
卤無右衛門
楓が腹を
娘
ひつく

左右りうつきて。背を撫さすり。共ふ涙をおとし。法介抱をるふいとで
悲しさ堪うけりぶむ右衆つ目を忘びたりき。我つくおりふ。義波が
怨念子ども笑をかやまし。我笑夫婦ふおりひとさせて宿恨を
報ふふうぶひかし。かれ一點の罪かくもて殺さたれば。深く恨も理なり。
三代相恩の主君のためふせしこと。たひ子ども笑をとり殺さる
とも悔べきふわるを。礒菜歎くふ我を少しも悲しかるべと。歎き泣胸よ
おしかくしていべば兄弟の子ども笑にをそうへ父うへのうるへ不うべうの。
忠義のるふもるひし其報とうけべ。たとひ我しが身いふの憂目
を見るとも。寡ぞるもいふべきにわるを。毋人よ涙くうげきたまひく。又も
病をひきいぐしまるかと。年ふ似合ぬ理發り詞。孝心ふうきさ
けるげさに。大丈夫のふむ右衆つも。胸ひしとおしふさうぶおびをぶうし

涙を拳とるておしぬぐひ。歎を見せぬ武士形衆の心のうちおもひ
やれておう義あり。かくて又志ぞくく月日とおくりけるが。栗太郎盲目
のことあれば一生をうを世にうりの種ふん琵琶を学ぶ。琵琶法師
とうさばのちくい高官ふもとうん。貴人のそば近くめさるく事も
あるまじきふわるとぜうてい生涯安穏の計をあしつうをべしとそい
つき。頭を剃めく名を丈弥くう人。礒菜をつけく京ふのぼせ其比音曲
と伝て名高くうへし。沢角撫校のうふ法師ふ伝ひ弟子とふ奉公
さも専琵琶をうをせけり

七　呪詛の毒鼠

扨も大和の國佐〻木の舘ふおきて。判官貞國子息桂之助を
勘當して後。銀杏の前月若母子と。平群の下舘ふ移せ名古屋

三郎左衛門同山三郎父子と。守役として付おりしぬ扨桂之助の繼母蜘
手の方といふ志毒悪ふ〜てかゞて桂之助夫婦をふくゝいふもちて
桂之助を失ひ實子花形丸と家督ふせんかしと思ひ居けるが思ひとゞ
桂之助勘當の身となりられべ心中ひそかふ喜びり又月若家督ふるん
こともやと待へべ何ぞ〜てかれ望母を失ひたくゝねもうとへども
かれ望ふへ忠臣名古屋父子つきをひ居る。片時も心をゆるさねべいふも
せんかなく打過けるが不破道犬妻智ふりけまべ蜘手の方の心底
悪意あるこゝ成見ぬきこれ我大望をとぐるよりは便りとなりひ一時蜘
手の方ふ近づき好意深き体ふひうく擇ろこゝ及ふ果して月
若母子と失ひ花形丸を家督ふ〜なき望こゝあれべ道犬もうく
何ぞも基ふまゝせるへふふまゝひまゝせんとはぶひけるあと蜘手の方と

かのめるゝど去びぬかくて道犬蜘手の方と密談し先月若と呪詛
をべきにさるる其比〜呪詛の法を学ぶ得る。頼豪院ふ修驗者を
ひそふまゝき射物とおりよへくなのけふ貪欲深きめのかれべ速
ふうけべ密室ふとぢこりて修法ふをかをけるさるかとふ平群の下
館ふ銀杏前月若母子を人移住名古屋父子これを守護して
ありけるが月若いこゝ已ふ土オふをいりけるまるふ月若偶病をけるて
打臥寢食安こゝも次第ふ痩おこへ良医をえらび霊薬をとのるる
さいくども更ふもうふくなるく眠れべおそれおびゆること安くなり
殊更怪むべきふ深夜ふいこれば看病の男女おびへを祈りを生じ
鼠おりく出く病床を飛めぐる後ふ昼も出く人をもおそれをふふ
尤滿〜月若の髪の毛をこゝひ肉をもこゝひ骨ぐ。頭ふ毒瘡を発して

痛堪がたく。心素日をもひておもうけり。母銀杏前歎悲しむこと抜りなく。神社仏閣に立願し。名僧知識の加持祈祷とゝ尤ゆくゝ人どと。妖鼠ちぎらるゝ益怪きこのゝおもうけり。名古屋父子へ昼夜病床をまもるゝ看病けるが。三郎左衛門山三郎ふむひていひけるは。我曽て西陽雛組を見るに人夜間ふしゆゑのして髪を失ふ者鼠の妖あり。又鼠人ならび牛馬に着まりて昼夜避をゝ。いくともとるこゝろ。若君の御客体をうかゞふ彼書に記を呼の尋常の妖鼠ならず。かゝるゝ呪詛する者ありて障礙をかゝとあがりり。仏をつけく怪異の出所を見あらまべしとひければ。山三郎某も尤こと思ひ入れこゝろ別して心をゝらひ。寝殿の四方に眼をこらして守護しけり。さて一夜丑三つのころ。銀杏の前をもぐり。

御手医者。弘毋侍女等もおびくをれありと生じたるに。不思議や犬校群の大鼠行廊の方より歩み来る。形の常の鼠あらずとゝ人ども共おゝいたゝ犬のごとくなる形勢なり。あるあやしやと山三郎。刀を携へたゝつえつと瞬もせず見あるるに。かの鼠いそひくみく若君の病床近く飛来る。山三郎いそぐく立上り刀を抜。まちまうけく下ど切ふ。妖鼠を身とおどして剣を避。あり障子を蹴かぶりて。庭上に走り出築墻のうへに飛のぐる。山三郎追うけいで手ぐゝ小柄を抜とりて。ゑいと打べあるまぐ鼠の額にぐさたら。鮮血たらくゝ流れるゝ。忽一道の烟のごとく妖鼠立のぐり。頼豪院が姿髪髯あらはる。山三郎ゝゝ怪き曲者く思ひたく。おぐり上りて頼額二つと斬つる。頼豪院閃と身を避。平形金珠をおしめみく。

佐く木
桂之助の
若君月若
妖鼠の
所為ゆゑ
奇病と
なるらん

呪文をとなへ忽暴風にもよほし。庭の樹木のそよをちし。池水を巻あげ。寢殿大ゆ震動し。瓦落々々と鳴どゝろみ。今も崩かとおもふ。時ゆ若君の壱〻くあるやうもなくて泣悲しゝてかなびをし。ばかりぶる山三郎那裡も氣づかひ。這裡も去れをぶくび刀を打ちくきんをせしが。頼豪院の数十の鼠を吐。その鼠山三郎ゆ飛かゝり。五体をくそくそとかれをあるはゆ殘念とひたゝ。又きうつきび忽ゆ頼豪院が形をくもり。唯雲霧のらぢをかりたるごゝゆ。あゝもつぬ庭上ゆ只ひとり山三郎。拳を振り歯をかゝるに。虚空をあゝみく立なりけり。頼豪院はあゝく身をのゞれうとのゝども。山三郎が忠義一圖ゆ精神をこめたる手裏剣の疵治せをゝて。呪詛の法忽ゆ破まりれば。ねのゞゝ若君の病日を追て山嶽の危命となりちけり

⑧ 暗夜の駿馬

扨も蜘手の乃ゝさへ。頼豪院の修法破き。月若快氣のゝをまて。大に力とおゝ。いゝゆる計をゝゝ。彼等と矣へべきと。乃おをとめしゝく密談ありけゝふ。奸智おゆ紀乃太少しも居せど。再又一計と生じ。蜘手の方の耳ゆつきてさゝゆけば。蜘手の方ゝゝとすゝ。ふきゝゝく妙計多と表ひ。ろゝて重病の体をゝし。のゝゝゝゝとゝゝけきば。判官臭國大におどろき。乃太とめして医療のゝを相談あゝ。乃太かけゝ。奥方の御容躰をゝゝゝゝたゝゝゝゝまゝしく邪祟の所為かゝゝゝゝ。たゝひ耆婆扁鵲が神方なりとも。藥の力をゝくゝひかとゝゝゝゝゝゝゝゝ。近曽京都ゝ下り頼豪院ゝゆ修験者

安部乃晴明ゞ金烏玉兎の神書と家傳し。ト筮ふ妙を得る
りのふいへばかしとめ〜てうらふつゼ。おんまるあしらし。幸唯今其宅ふまり
居いとやそ。貞國これをまそれいそぐ〜くめ〜しよぐとおふせられい道犬
かしこ〜こ〜ひ〜てゆゞて私宅ふひつはい〜ひり。頼豪院ハ額乃疵ゆう
ゆく癒再道犬ゞ妖訛ふ〜ひしるゞ。召ふ應じて。貞國乃目ぐりい
まろいでゆ身乃丈たっく眼中光り。斬髪ちぶし〜らるのさ〜。兜巾
篠懸ふ。紅紗の衣を着し。最多角の念珠を袖くみふ指中啟
乃扇を把わうもまで中れ金張付乃廣坐敷に。ゆめどおくせど
坐〜たる体誠ふいつるれ悪魔とも降伏をゞき骨柄なり。貞國まゞ
初見の挨拶おり。奥方乃病体を告てト筮を乞きけるふ頼豪院
恭く卦と敷下し。孝を施〜ていく。奥方乃御病氣全く呪咀をる

者ありて。苦〜めやをふ疑ふし。今四五日をゆゞ御命危るゞ〜。
若疑〜おゞ〜玉りゞ。御寢所の庭中艮の隅乃土中三尺をりっせ
見なまりゞ。分明ふゞ〜ふ貞國羊信羊疑ふゞ。近仕乃士ふ命じ
玉へゞ。近仕乃士かしこふいつり。土中をりしむふ果して一合乃白木乃
箱を得く携へ来り貞國ふたてまろ。貞國これをひきあふ内に
大小二ッの菓人形ありてをきるもふく釘を打たり。貞國大に怒られ。
頼豪院ゞ詞を奇なりとこれ呪咀にうゞびふけまゞ。別ふ一物も
ふけまゞ。何人乃所為ふや。分別ぢ〜といれけるふ。頼豪院膝を
ちゝ。凡呪咀の法ふ。願書かくてかるひゞ〜。其箱これへといひく
箱を取あげつ〜〜見て。ゆゞて扇乃尻とゆく。箱乃底をつきぬき
けるふ。かゞゝ底ふ〜て其ちっり一通乃願書出さり。貞國こまを

名古屋山三郎
若君の寝殿へ
宿侍ー妖鼠
千裏剣を打
俄か暴風起て
寝殿
鳴動を
なごや山三
なごやこうたろう

名古屋卷之二

とうひらき見れば蜘手の方花形丸。両人を呪詛するの願文を。銀杏の
前月若両人願主の名あらはす。自筆をもつてかき
たれば。ぐぐもあるを。負國忽怒氣心頭ふかう。面色変じて。
ちぐ〳〵のものをいそがせけり。先頼豪院ふ呪詛をなしひのそく修法を
けるふる。蜘手の方の病床ふ壇を設けて。災禳の法を修し。かの
藁人形ハ釘をぬき。護摩の火中ふ投じて。焼をそうかくて蜘手の方。
やうく快氣の体をふ。負國ふむひてらひけるに。妾ことかなて銀杏前
田子を。實の娘実は孫といふ。何ぞ桂之助の勘當をゆるし
たまふべきぞと月若を家督ふしたまふ所ぞ。それのみ宿願ふるふ。
かれらハかへりて妾を繼母といきどほり。若花形丸家督ふうんこもやし。
さねぐりあて。妾親子を呪詛殺んとハ計ふん。養蘖新〳〵て心い

恩よりもなかおそろしくいふ。ひ祇ぐくへ。妾親子ふまをいふとなり。
尼法師ともかゝむれば。我くかくてあゝべつふかれしらず生要ふとう
殺されひつる。ぐてさぐう妾親子を忌きふぞ情ふき銀杏前やと
ひて涙を滝のごく流しぬ。此時花形丸ハ年已に十六才いまざるの前
ふくありけるぐ。母の悪性ふん落かぐも似を志正しき生まるり素母
の非望をとゝぐ。日の子細をまて大ふ歎息し。かゝる凶事のいでる
こと。皆これ某ぐ誤なり。檀弓篇ふ昆弟の子ハ猶己の子のごとしとう。
某月若ふ對して。鄧伯道ぐ兄の志をゆくなりそ法ふ楽こけり。
判官負國蜘手の方の恨の詞花形丸ぐ理おやき詞をまて銀杏前
田子を盃ふく。親と呪詛する大罪人。片時もなをけ母ぐしそ黒星
眼平くつのとめし出し。銀杏前月若両人の首打く棄まと

命じければ蜘手乃方道犬と者見合志をあ〜なりとあのひあ〜ゑれを
さぐろ〜ゑれども負國まを入を。花形丸い殊更ふ詞をけしてそむきども。
火性短氣の負國少〜も宥免かろうければ。のとよう道犬一味乃黒星
眼平。迷惑者ふ〜其坐を退き。君命とへども。母子乃首うさんと
いまぐ。名古屋父子。たまく〜い渡をまぐ。ちる時い乳母ともふ打〜ん
と抱りひき。四五十人乃荒男等を引具して。年群の館へいそぐ。
鳴呼銀杏前親子の身乃うへ。危かりける次第なり。此支ま〜
下館ふまへければ。名古屋父子大に驚き。三郎左衛門山三郎ふ
むひ。ゑれ正〜く不破道犬が妖詐ゆく。姫君ふぬれ衣とおゞ。御母
子ゆ失りんとまるふ疑なり。打手乃むらぬさゑ。某急ぎ上館ふいろう。
一命ふうへてもカ〜ひきまて。御命と救まらせんとて。いそぐく礼服を

急く。撥出ス馬をひきせてひらり〻打乗供人のそうふひなもおそ〻〻
心せよ。鹿藏とゝふ下部ハ提灯めゝせ。走出んとあるゝふ。三郎左衛門ガ刀
鞘ぞ〻ゝをれば。山三郎乗ふかゝ。雪づゝふるゝ法。親人御如在ハある
まゝきゝ。道犬ハ奸智ハ深き者ハ。ふがゆゝぞ彼ガ計ハ。ふもちどもハ
衆を得ふ。一言ノ詞も心をつけ〻〻のまへゝへば。三郎左衛門ガ
ゝるゝ。そハ合點ゝ。ゝるゝぞ乗づゝふ支ゝ。ふゝ。ゝる内乱ノゝゝ。
御側近き者ゝるハも油ゝゝ。ゝ〻ゝ。唯御二方をゝ〻守護ゝ〻〻
捨て一戦あて。疾ゝぐ〻ふ走ゝゆ〻。山三郎身をそゝて。かげゝゝ
まで見おゝけゝ。折〻も移ぐゝるゝ夕烏ハ悲〻げふ鳴をゝ。ゝ烏
ゝのあ〻きハ御二方ノ御身ノゝゝ。親人の身ノゝ〻。ゝゝまふも
あしゝゝ乗づゝ〻と吐息〻。胸をゝもゝるゝゝ。ゝゝ世ハ別

ゝハ後ハを思ひ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝハ又不破伴左衛門重勝ハ。先ハ君命
ゝハ。ゝ。名古屋山三郎ハ草履をゝ〻〻面を打ま〻と。ふゝ〻
遺恨ハ思ひ笹野蟹藏藻屑三平土子泥助犬上雁八郎四人ノ
者とゝ〻ゝひ夜〻平群の舘ノ近辺と徘徊〻て。山三郎とつけ
けゝ。山夜も八辺ハ出び来ゝてゝゝ。ゝ夜ハ宵闇ゝ空ゝゝゝて
星も見ゝず。あゝもつゝ暗夜ゝてありけゝ。三郎左衛門ハ麻殼ハ挑灯
持セ。馬を疾セ〻急ぎ来ると。伴左衛門ノ五人ノ者。三本傘ノ
級つきゝ提灯をゝて。山三郎ハゝゝ〻〻ゝ思ひ物陰ゝ一同ハ
抜ゝ出まゝ提灯をゝ〻〻〻〻麻殼ゝゝ。一腰ハ手を
かけて。何者ゝやゝとゝ。三郎左衛門ハ馬をとゝ。こハ辻斬ノ
曲者ゝ盗賊ノ所ゝかゝひけ。肩衣ゝのけ。刀ハ抜ゝ。馬ゝ

孤ぐるひなもあるべしと。伴左衛門斬つる白刃の稲妻目前に閃れば老功頓智の三郎左衛門馬のかげに身を隠るゝ。伴左衛門刀ふるひ鐙ふまへ一きりつきて。火花ちらと散り。晴夜しらひ木立ちはげしき所なれば一寸先も見へねど。藻屑三平土子泥助馬の脚音と心あてに。前後よりきりつくる。目あてちがひ思ひ〻に両人同士打ふり〻打合と剣の下をくぐぬけ〻三郎左衛門ひきふきる刀大上段八ぶ鼻りされにぞうれば。胸ひをりとそのけぞりて。伴左衛門心中ふかし時をうつさんと思ひけん。息をとゝのへ三平泥助雁八名もわうと揮て立まはり或へ互ふ同士打しを。薄手をおひ或へ木立ふきりつけ〻素とりろ。三郎左衛門今ふ果せる大ゝを かくる身なれば好て戦心あり。早く山場とのがれやと急ぎ出けるも。

四人の者ふかこまれてせんもなべるべうもあらぬ。三平ぶ片耳をそぎ。二の太刀ふ雁八ぶ小指をきり落し。両人心臆して。一ぶ〻ぶ。三郎左衛門ぶ肩尖七八寸切こゝぬ。痛手ふ屈せぬ強者と。伴左衛門ぶ老人なれば。たゞ〻とよろめく所。伴左衛門。たゝみかけて。胴腹を浄く切こゝれば。三郎左衛門ぶ一声呼とさけびく。尻居ふ噇とたをれぬ。伴左衛門揮りて。髻つかみ〻ふせ。こゝをさいはい。伴左衛門重勝ぶ。ふ山三郎。汝君命とはいひながら。我と辱める恨骨髄ふとおもへば。今其仇を報ずべき。怪中より。

不破道犬
くもでの方
判官貞國
眼平

不破道犬
蜘手の方と
銀杏の前
月若丑子を
詞を
花形丸

物ふ包し草履のかたしを取出し。れいこれ先年海我を辱め
たる上草履あり。膽玉ふこそへよとのひつ。連打ふ打けるあそ。三郎
左衛門苦しげよ息とつき。汝等へ辻切ら盗賊ら思ひつるふ。さてい
伴左衛つあそありけら。我いこれ三郎九衛門ふくとふ吉ゆて。扨い
人たぐへせしかと伴左衛つ皆一同ふおどろきら。三郎九衛つ刀をぐり
て立上り。児子に仇をむくふよも せよ。だまし打くに此奥ふ奴我
年こそ老され。名高き食の勝負ふ。汝等ごと犯の鼠輩ども。数
十人来るとも物の数とい扨りい称ども。暗打ふせくるとい。武運ふつき
たる身のたそよ犯る食い物しかい称ど。唯心強りい清二方れ安不口を
ゆで相果るふ。さといひつ。ようぐひまるを伴九衛つ皆已刃て。
合破と蹴倒し。山三郎と思ひの外。運乃尽たるあひぐれめ。山三よ

あ。ぬい強念ふれど。汝を打しも又此方ふ幸とまるこそあり。問詰い答を
さく犯ねしとゆくさげふ詈つ。めろと切ふとり。れば三平。泥助雁八等
も。三郎九衛つ苦痛の声とちぐふ立よりてすくふ斬つ付。鱠ぬ
ふそなくたりける。折しもちぐの鐘打交て。諸行無常と告渡。
小田の蛙ら鳴ちそいくぐ表どそへふり。僕鹿藏い先程とり。
蓋野鰻藏と渡り合。深田の中ふ踏こみて。たるひよ呼吸の息を
心あてふ戦双方薄手をあひりる。鹿藏三郎九衛つ伴九衛つ
ひあふ詞を遥ふ付け。扨い彼奴遺恨ふとり人たぐへてそや
御主人と手よかけしかく仰天し。鰻兎と捨て。主人乃吉を方へ
探りゆんとる此。三平雁八さんとと立ちぐり。両人ひくく切りけ
たり。麻兎れを丁とうけあ。又もゆんとくなる時。雨雲れて一輪乃

明月皎くとかゝやかに出木の間とうて光りあるかりしば。廉義五人の者を見るに。伴なまつをたゞの四人の者皆見えうたるわのごもなり。五人の者も廉義いかゞて見たりの下部なれば。生おそれ後日のさまゝげなり。一同ふるまいてきりたる揃て切つる。勢猛廉義も。双拳四手に敵しがたゝ。たゞ〳〵危く見える不ふ。三郎左衛門つぶ手馬一疋いぐえて荒出し。五人の者を踏たふ〳〵蹴たふ〳〵ければ。五人の者ハ大に狼狽たゝ〳〵ひてたゞ〳〵たりける。鹿義大にふふ。金剛蹴りふ刀をまわし。四面八方をきりたる五人の者一方ハ荒馬ふ蹴ちらし。一方ハ鹿義が記物狂ふきりたゝしつゝふ敵をるこゝあるいどゝちあ〳〵出〳〵て逃いぐやゞ廉義主人の敵のゞ〳〵ようぐりつ。韋駄天走りふ追行りる。折しもひふの方より。黒星眼平。四五十人の荒男どもと引具し。高挑灯ど前ふたて。行列をつゝ林ゝをを払ひて足ぐやゝをみ来る。鹿義これを岐と見て。正是上館の打手るゝん立飯りて註進ぐさる。彼等追て仇を報んと。心ハ二ワ身ハ一つゝなれて思案しゝ。ぐりてハ躊躇しゝ。ゝ所をつて分ゝ。ゝ。ゝ。ゝ黒星眼平ハ時刻とゝ。平群の下館ふ来せしひ。これハ大殿の書令とゝ。銀杏前ふの月若ふ。親子の歩者をたまりんゝふ。名古屋父子ハ〳〵くよ。ゝ方をにゝをべ〳〵と。色たゝ〳〵ふりぐりけれバ。ゝ一大事と第中大ふ騒動し。名古屋山三郎走出其儀を刻者館ふ告る者あるふり。父三郎左衛門御助令を願んなり。先刻上館へまり志ぐ〳〵狂乱ぐさるべ〳〵と。ゝゝも果ど。ゝ〳〵書令ゝれば。ゝ時も

待こと相うべしと。若遠背ふおうぐ。某奥へ踏込て御首打べし。返答いふといふ。山三郎たるうへい是非よわうぐ。某命あんかぎりへ。御二方と後をことう。まうるべしいひたくやや身支度してとこいで斬死をべき勢あり。眼平あざく笑大殿のおんせ紙背く不忠者先彼を打取と下知をしば大勢一度ふ乱入し。山三郎ととりかこみ。火花をちして戦ふ。こるる多勢山三郎へを一人と又ども。忠義をるぶた太刀さきふ斬まてれ。ちどろよりぶて大庭までさろとひく。其ひあふ山三郎。奥ろ殿よりせまり。姫君若君よりひ。父が吉左右をけなるまでん。一旦舘を帰たらのきあれうしといふるぞ。月若の乳母柏木とふ者女ともかいどきのもそ。姫ハ若君をあづりておちゆべし。山三ぶへ姫君と守護してぬたちのたあれかしそつと

かいしく身支度し。若君とせおひ。長刀ハ小脇ふとみて。後門より落行ぬ。山三郎ハ姫君をおひまゐせつぶいてのぶれ出んとしたるぶたや後門ふも打手のつハりの支まりてさへられば。山三郎ちやりのくしと。よづりて。多勢のうち仮きりひくれて生駒山のかくべぞおちゆきけり。道犬が奸計の子細をたづねるよ。偽筆の達人をたのこ。浪杏前の手跡を見せて。偽願書をかしの。味のりのそそ。かまて庭中ふ埋りおきけるきつつ

山三郎姫ハせおひて和ち行。生駒山の林麓の辻堂ふおいて。危難ふあふこと。つぎの巻を讀得てたべ

巻之二終